

幼児の自由な集団編成に及ぼす人気度と社会的行動特徴の影響

越中康治・江村理奈・目久田純一・前田健一

Effects of popularity and characteristics of social behavior on free forming groups in young children

Koji Etchu, Rina Emura, Junichi Mekuta, and Kenichi Maeda

本研究では、幼児の自由な集団編成に及ぼす仲間からの人気度と社会的行動特徴の影響を検討するために、保育園における整列場面（幼児が自由に2人組あるいは3人組を編成する場面）の観察と、人気度及び社会的行動特徴の測定を行った。結果として、男児では、集団編成に人気度の影響は認められず、攻撃性の高い者ほど3人組で中央の位置を占めていることが示された。女児では、2人組を編成する際には、仲間から人気がある者及び社会的コンピタンスが高いとされる者ほど容易に集団編成を行うことが示された。また、3人組を編成する際には、攻撃性の高い者ほど容易に集団編成を行うこと、引っ込み思案で非攻撃的な者ほど3人組で中央の位置を占めていることが示された。幼児の自由な集団編成に及ぼす仲間からの人気度と社会的行動特徴の影響は、性別や編成する集団の人数によって異なることが示された。

キーワード：集団編成，仲間関係，人気度，社会的行動特徴，幼児

問題と目的

幼稚園におけるエスノグラフィ研究（結城，1998）から、保育者は、保育の目的や内容に応じて、複数の子どもをある基準をもとに編成し、それを保育活動の単位（集団単位）として意図的に利用することが指摘されている。集団単位には、「保育・教育の場で一般化している集団単位」（例、学級、性別グループ）と「保育者の裁量に委ねられている集団単位」（例、座席グループ、カリキュラム活動におけるグループ）とがある。その中でも、後者の「保育者の裁量に委ねられている集団単位」の編成には様々な様式があり、編成の様式は園・保育者によって異なることが指摘されている（結城，1998）。

保育者の裁量に委ねられている集団単位の編成の様式には、大きく分けて、①「技術・能力、性向を基準とした集団編成」（例、リトミック、鼓笛、劇など）、②「ランダムな集団編成」（例、ゲーム、お茶会など）、③「幼児による自由な集団編成」（例、座席グループなど）の3つの様式がある（結城，1998）。すなわち、保育者は幼児の月齢や能力などを考慮して意図的に集団を編成することもあれば、集団編成を幼児の自由に任せることもある。様々な編成様式の中でも、幼児による自由な集団編成がなされた場合、幼児は好きな仲間と一緒になることを志向するものと予想される。つ

まり、幼児による自由な集団編成には、幼児の仲間関係が反映されるものと考えられる。

幼児による自由な集団編成を取り扱った研究としては、保育園の食事場面における幼児の席とり行動（仲間を誘う、拒否するなどの行動）に着目した外山（1998）がある。外山（1998）は、保育園の2歳児クラスと4歳児クラスを対象として、食事場面において幼児が自由に席を決める様子を観察した。その結果から、幼児はタテの位置関係（対面あるいは斜めに相対する位置関係）よりもヨコの位置関係（隣り合わせあるいは直角に並ぶ位置関係）を好むこと、席とり行動は4歳頃から頻出するようになることが見出されている。外山（1998）は、ヨコの位置関係が好まれることについて、「手をつなぐ」などの身体接触行為が友達関係を媒介する役割を担っていると考察している。また、4歳頃から席とり行動が頻出する背景には、この時期に、仲間関係が特定の・持続的になることがあると考察している。

外山（1998）から、幼児による自由な集団編成では、幼児が積極的に仲間を誘ったり、拒否したりするために、仲間から人気のある者ほど容易に集団編成を行うことが可能となり、仲間から人気のない者は集団編成に困難を示すことが予想される。つまり、幼児による自由な集団編成には、仲間からの人気度などの要因が影響を及ぼすものと予想される。しかしながら、外山（1998）では、普段の仲間関係の測定は行われておらず、幼児による自由な集団編成と仲間関係との関連について、直接的な検討はなされていない。また、従来のソシオメトリック法を用いた幼児の仲間関係に関する研究（e.g., 越中・目久田, 2005; 越中・中村・前田, 2003; 越中・滝下・前田, 2005; 前田, 1995; 前田・片岡, 1993; 中台・金山・前田, 2002）においても、仲間からの人気度と仲間・教師評定による社会的行動特徴との関連については検討がなされているものの、集団編成などの実際の行動との関連を取り扱った研究はなされていない現状にある。

そこで、本研究では、幼児による自由な集団編成と仲間関係との関連について検討を行う。本研究で対象とする保育園では、お集まりなどの際の整列場面において、幼児が自由に集団を編成する様子が見られる。この園における整列場面は以下のようなものである。雑然と集合した子どもたちを前に、保育者が「〇人組になって並んでください」と言う。幼児は仲間を探し、指示された人数で手をつないで横一列になる。指示通りに組をつくった者たちから保育者のもとに集まり、前から順番に並んでいく。

このような整列場面においても、食事の際に座席を決める場面（外山, 1998）と同様に、幼児が積極的に仲間を誘ったり、拒否したりする様子が日常的に見受けられる。「手をつなぐ」などの身体接触行為が幼児の友達関係を媒介する役割を担っているため、ヨコの位置関係が好まれる（外山, 1998）という指摘は、本研究で問題とする整列場面にもあてはまると考えられる。このような整列場面では、次のようなことが予想される。第1に、仲間から人気のある者ほど早く組をつくって列の前方に位置する。第2に、3人組で並ぶときなどには、人気のある者ほど中央の位置を占める。第3に、前から何列目に位置するか、3人組で中央の位置を占めるかということは、幼児の社会的行動特徴を反映する可能性もある。以上を踏まえ、本研究では、幼児による自由な集団編成と仲間からの人気度及び社会的行動特徴との関連について探索的に検討を行う。

方 法

参加者と調査時期

第1著者が保育士として勤務する東広島市内の保育園に在籍する異年齢クラスの男児13名、女児13名が調査に参加した。調査は2004年3月上旬から中旬にかけて実施した。調査実施時の平均月齢(月齢範囲)は、男児が60ヶ月(50~70ヶ月)、女児が57ヶ月(49~72ヶ月)であった。なお、同クラスは、第1著者と保育士1名及び保育補助者1名が担当していた。

手続き

幼児による自由な集団編成場面(整列場面)の観察を行った。同時期に、個別面接により、写真ソシオメトリック指名法、写真ソシオメトリック評定法、社会的行動特徴に関する仲間アセスメントを実施した。

(1) **幼児による自由な集団編成場面の観察** 保育園における男女別の整列場面を観察した。2人組で整列する場面(以下、2人組場面)、3人組で整列する場面(以下、3人組場面)を各5回観察し、ビデオ録画を行った。雑然と集合した参加者たちを前に、保育者が「○人組みになって並んでください」と声をかけてから、全員が並び終えるまでの一部始終を録画した。声をかける保育者の側からビデオ録画を行い、参加者一人ひとりについて、整列の際に前から何列目に位置したか、3人組場面では中央の位置を占めたか否かがわかるように録画を行った。なお、観察は、参加者が全員出席している日に行った。

(2) **写真ソシオメトリック指名法** 前田・片岡(1993)に従って、写真ソシオメトリック指名法を実施した。同性仲間全員の写真カードを机上に配列し、名前を確認させた後、肯定的指名(一緒に遊びたい子は誰ですか)及び否定的指名(一緒に遊びたくない子は誰ですか)をそれぞれ上位3名まで求めた。

なお、前田(1998)は、否定的指名が実施後の仲間関係に有害な影響を及ぼさないとしながらも、実施に際しては、倫理的・道徳的問題を十分に考慮することの必要性を指摘している。本研究においても、実施に際して、前田(1998)に従い、可能な限りの配慮を行った。なお、実施後も、第1著者が担任保育士として、幼児の様子に細心の注意を払ったが、幼児の仲間関係等にトラブルは生じなかったことを付け加えておく。

(3) **写真ソシオメトリック評定法** 前田・片岡(1993)に従って、写真ソシオメトリック評定法を実施した。同性仲間全員の写真カードをランダムに、1枚ずつ参加者に手渡し「一緒に遊びたい子」「一緒に遊びたくない子」「どちらかわからない子」に分類させた。

(4) **社会的行動特徴に関する仲間アセスメント** 前田・片岡(1993)に従って、社会的行動特徴に関する仲間アセスメントを実施した。写真ソシオメトリック指名法と同様に、同性仲間全員の写真カードを机上に配列し、攻撃性(「よくけんかをする子」「自分の思いどおりにならないと、すぐに怒る子」「お友達によく命令する子」)、社会的コンピタンス(「みんなと仲良く遊ぶのが上手な子」「お友達に親切でやさしい子」「みんなから人気がある子」)、引っ込み思案(「お友達にあまり話しかけない子」「おとなしい子」「お友達とあまり遊ばない子」)の3つの行動特徴に関する各3項目について、該当すると思う仲間をそれぞれ上位3名まで指名するよう求めた。

得点化の方法

得点化の方法を以下に示す。なお、本研究が1つの異年齢クラスを対象としたこと、対象とした異年齢クラスの男女の人数が同じであったこと、さらには男女別に分析を行ったことから、仲間一人当たりの指名数の算出及び標準得点化は行わなかった。

(1) 幼児による自由な集団編成場面の観察 幼児による自由な集団編成場面の観察結果の得点化については、第1に、参加者一人ひとりについて、前から何列目に位置したかを得点化した。2人組場面では、6列できて1人余る。参加者が、最前列に位置した場合は6点、2列目は5点、3列目は4点、4列目は3点、5列目は2点、6列目は1点を配点した。3人組場面では、4列できて1人余る。最前列は4点、2列目は3点、3列目は2点、4列目は1点を配点した。2人組場面、3人組場面それぞれで5回の得点を合計し、2人組得点、3人組得点とした。得点が高いほど、各整列場面において参加者が列の前方に位置したことを意味する。

第2に、参加者一人ひとりについて、3人組場面において中央の位置を占めた回数を得点化した。参加者が各組で中央の位置を占めたとき1点を配点し、5回の得点を合計したものを3人組中央得点とした。得点が高いほど、3人組場面において、参加者が中央に位置したことを意味する。

(2) 写真ソシオメトリック指名法 前田・片岡(1993)に従い、参加者ごとに仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数を集計し、それぞれ肯定的指名得点、否定的指名得点とした。肯定的指名得点が高いほど仲間から肯定的指名を受けたことを意味する。また、否定的指名得点が高いほど仲間から否定的指名を受けたことを意味する。

(3) 写真ソシオメトリック評定法 前田・片岡(1993)に従って得点化を行った。参加者一人ひとりについて、仲間から「一緒に遊びたい子」に分類された場合は評定値3を、「どちらかわからない子」に分類された場合は評定値2を、「一緒に遊びたくない子」に分類された場合は評定値1を配点した。その後、参加者ごとに評定値の合計得点を求めた。この合計した評定値は、参加者が仲間から受容される程度を表わす次元の得点である(前田・片岡, 1993)。

(4) 社会的行動特徴に関する仲間アセスメント 参加者一人ひとりについて、各項目別に、仲間から指名された数を集計し、各尺度ごとに得点を合計して、攻撃性得点、社会的コンピタンス得点、引っ込み思案得点とした。得点が高いほど、各行動特徴を強く示すことを意味する。

結果

ソシオメトリック得点と仲間アセスメント得点及び月齢との関連

まず、ソシオメトリック得点と仲間アセスメント得点及び月齢との関連を検討するために、ピアソンの相関係数を算出した(Table 1)。男児では、肯定的指名得点と社会的コンピタンス得点との間に有意な正相関がみられた($r=.64, p<.05$)。女児では、肯定的指名得点と社会的コンピタンス得点($r=.78, p<.01$)及び月齢($r=.61, p<.05$)との間に有意な正相関がみられた。また、評定値と社会的コンピタンス得点($r=.63, p<.05$)及び月齢($r=.56, p<.05$)の間にも同様に有意な正相関がみられた。全体として、参加者が少なく有意な相関がみられない部分もあったが、男女ともに仲間からの人気と社会的コンピタンスが正相関を示し、女児では仲間からの人気と月齢が正相関を示したとい

う点は、先行研究 (e.g., 越中・目久田, 2005; 越中・中村・前田, 2003; 越中・滝下・前田, 2005) と概ね一致する傾向であった。

Table 1 ソシオメトリック得点と仲間アセスメント得点及び月齢との相関係数

	男児 (n=13)			女児 (n=13)		
	肯定	否定	評定	肯定	否定	評定
攻撃性	-.06	.36	-.36	-.05	.30	-.28
コンピタンス	.64 *	-.44	.43	.78 **	-.48	.63 *
引っ込み思案	.13	.18	-.34	-.08	-.13	-.26
月齢	-.27	-.22	.30	.61 *	-.06	.56 *

注) ** $p < .01$, * $p < .05$ (両側検定)

整列得点とソシオメトリック得点, 仲間アセスメント得点及び月齢との関連

整列得点とソシオメトリック得点, 仲間アセスメント得点及び月齢との関連を検討するために、ピアソンの相関係数を算出した (Table 2)。男児では、整列得点とソシオメトリック得点との間には有意な相関はみられなかった。しかしながら、社会的行動特徴については、3人組得点と引っ込み思案得点との間に有意な負相関がみられた ($r = -.65, p < .05$)。さらに、3人組得点と社会的コンピタンス得点との間に負相関の有意傾向 ($r = -.50, p < .10$)、3人組中央得点と攻撃性得点との間に正相関の有意傾向 ($r = .52, p < .10$) がみられた。また、月齢と2人組得点 ($r = .60, p < .05$)、3人組得点 ($r = .56, p < .05$) 及び3人組中央得点 ($r = .64, p < .05$) との間に有意な正相関がみられた。

女児では、評定値と2人組得点との間に有意な正相関がみられた ($r = .63, p < .05$)。また、社会的行動特徴については、2人組得点と社会的コンピタンス得点との間に有意な正相関 ($r = .58, p < .05$)、3人組得点と攻撃性得点の間に有意な正相関 ($r = .80, p < .01$)、3人組得点と引っ込み思案得点との間に有意な負相関 ($r = -.68, p < .05$)、3人組中央得点と引っ込み思案得点との間に有意な正相関 ($r = .73, p < .01$)、3人組中央得点と攻撃性得点との間に負相関の有意傾向 ($r = -.53, p < .10$) がみられた。

Table 2 整列得点とソシオメトリック得点, 仲間アセスメント得点及び月齢との相関係数

	男児 (n=13)			女児 (n=13)		
	2人組	3人組	中央	2人組	3人組	中央
肯定的指名	.09	-.17	-.22	.46	-.01	.45
否定的指名	-.10	.17	-.02	-.26	.02	-.26
評定値	.17	.08	.09	.63 *	-.03	.00
攻撃性	.30	.41	.52 †	.18	.80 **	-.53 †
コンピタンス	-.14	-.50 †	-.41	.58 *	.15	.31
引っ込み思案	-.34	-.65 *	-.33	-.35	-.68 *	.73 **
月齢	.60 *	.56 *	.64 *	.33	-.08	.40

注) ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$ (両側検定)

考 察

男児では、2人組場面、3人組場面ともに、月齢の高い者ほど列の前方に位置していた。また、3人組場面では、引っ込み思案とされた者及び社会的コンピタンスが高いとされた者ほど後方に位置していた。さらに、月齢及び攻撃性が高い者ほど、3人組の中央を占めていた。しかし、整列得点とソシオメトリック得点との間に有意な相関はみられなかった。以上のことから、男児では、攻撃性及び月齢の高い者が中心となって集団編成を行っていると考えられる。一方、女児では、場面ごとに異なる傾向が見出された。2人組場面では、評定値が高く仲間から人気がある者及び社会的コンピタンスが高いとされる者ほど前方に位置していた。これに対して、3人組場面では、ソシオメトリック得点の影響はなく、攻撃性が高いとされる者ほど前方に、引っ込み思案とされる者ほど後方に位置していた。その一方で、3人組で中央を占めるのは、引っ込み思案で、非攻撃的とされる者であった。

なお、女児の場面による違いは、集団編成に要する時間においても見出された。参加者が保育士の指示を受けてから整列するまでの平均時間を男女で比較したところ、2人組場面では、男児が平均9.5秒 ($SD = 2.11$)、女児が平均11.0秒 ($SD = 2.89$)と差がなかった ($t = 1.50, df = 24, n.s.$)。しかし、3人組場面では、男児が15.2秒 ($SD = 2.89$)、女児が19.8秒 ($SD = 6.63$)であり、女児の方が時間を要していた ($t = 2.31, df = 16.41, p < .05$)。女児は、男児に比して仲間集団の構成人数が少なく、二者関係を志向する傾向にある (レビューとして Golombok & Fivush, 1994/1997 参照)。こうした指摘を踏まえると、女児の場面による違いについて、次のような解釈が成り立つ。2人組をつくる際は、単純に好きな者同士が組みとなり、円滑に集団編成がなされる。それ故、自ずと仲間から人気のある者が前方に位置する。一方、3人組をつくる際は、誰と組になるかが問題となり、集団編成が難航する。今回、観察を行う中では、実際に女児の3人組場面において、2人組と2人組が対峙して、どちらが1人を譲るかを交渉する場面が頻繁に見受けられた。その間、攻撃性の高い者が積極的に集団編成を行い前方に並んだため、先述の通りの結果となったものと考えられる。

今後は、こうした解釈の妥当性を検討する上でも、自由な集団編成場面における幼児一人ひとりの行動を観察し、詳細に分析していく必要がある。

引用文献

- 越中康治・目久田純一 2005 幼児の社会的適応と攻撃タイプ (2) 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学関連領域), 54, 印刷中.
- 越中康治・中村多見・前田健一 2003 異年齢集団における幼児の社会的適応—月齢, 語彙, 社会的行動特徴, 攻撃タイプ— 広島大学心理学研究, 3, 137-145.
- 越中康治・滝下雅子・前田健一 2005 幼児の社会的適応と攻撃タイプ (1) 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学関連領域), 54, 印刷中.
- Golombok, S., & Fivush, R. 1994 *Gender development*. Cambridge, England: Cambridge University Press. (ゴロンボク, S., & フィバッシュ, R. 小林芳郎・瀧野揚三 (訳) 1997 ジェンダーの発達心理学 田研出版株式会社)

- 前田健一 1995 仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究
教育心理学研究, 43, 256-265.
- 前田健一 1998 子どもの孤独感と行動特徴の変化に関する縦断的研究—ソシオメトリック地位維持群と地位変動群の比較— 教育心理学研究, 46, 377-386.
- 前田健一・片岡美菜子 1993 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント 教育心理学研究, 41, 152-160.
- 中台佐喜子・金山元春・前田健一 2002 幼児の仲間集団における人気度と社会的スキル—同性仲間と異性仲間からの評価— 広島大学心理学研究, 2, 151-157.
- 外山紀子 1998 保育園の食事場面における幼児の席とり行動：ヨコに座ると何かいいことあるの？ 発達心理学研究, 9, 209-220.
- 結城 恵 1998 幼稚園で子どもはどう育つか—集団教育のエスノグラフィ 有信堂高文社

謝 辞

本研究にご協力を賜りました保育園の園長先生、保育士の皆様ならびに園児の皆様に深く感謝いたします。